

教科教育キャリアアップフィールド

国語科における書くことの指導性

国語教育専修 小林 一 貴

概要

今回の研修では、コース名を「国語科における書くことの指導法」とし、書くことの指導を構想する上で問題となる「文種（ジャンル）」、「題材」の変遷を見ていくことを通して、実践を構想する視点から国語科の教育内容についての考え方について議論し、理解を深めていくことを目的とした。

研修の進め方としては、コースの担当教員が資料を準備するとともに、研修教員の実践に関する問題意識に基づいて議論を行うかたちをとった。そのため、第1、5日目は大学において討議を行い、第2～4日目はAIMS-Gifuを活用して掲示板において議論を重ねた。

1. 実施状況

第1日目から5日目までの大まかな流れは以下の通りである。

第1日目：8月1日（月）

午前：研修教員の問題意識に基づく議論を行う。

午後：AIMS-Gifuの活用方法と具体的なコンテンツの視聴、議論（MCS2を利用）。

第2日目～4日目

AIMS-Gifuの「コース文書」に週ごとに新たなコンテンツを載せ、それに基づいた議論を「掲示板」上で行い、5日目に向けた課題を持つ。

第5日目：9月2日（金）

AIMS-Gifuにおける4日目までの議論をふまえ、現在行われている書くことの学習指導の方法を複数取り上げ、それらについて教育内容の点から議論を行う。

・第1日目

第1日目の午前は、研修教員より普段の指導上の問題点を出し合い、それに基づいて自由に情報や意見の交換を行った。ここでは、各参加者の受け持つ学年や児童・生徒等、様々な立場、観点から発言がなされる。今回は、高等学校1名、中学校3名、小学校3名というように研修教員の所属する学校種もさまざまであり、指導上の問題意識も多様であった。各自が日頃の学校の様子や最近行った実践などを紹介しながら問題意識を出し合うことを通して、国語科における書くことの指導についてのとらえかたも異なることが確認され、またなぜそのような異なりが生じる

のかについても意見が交わされた。

午後は、MCS 2においてAIMS-Gifuの使用法の説明を行った。2日日以降に向けて、実際に「掲示板」に書き込む練習などを行うとともに、「コース文書」に載せてあった2つのコンテンツの視聴を行った。コンテンツは、Stream Authorを使用しノートPCを用いて研究室で作成したビデオとスライドによって構成される。これら、AIMS-GifuならびにStream Authorの利用については、MCRで2005年7月に4回に分けて行われた研修に基づくものである。

コンテンツは、具体的には「8月1日分 その1」「8月1日分 その2」として、それぞれ15分程の長さで作成した。内容は、「その1」では明治期の作文教科書や『少年世界』や『赤い鳥』などの雑誌を取り上げ、投稿作文について概説を行った。また、「その2」では『基地の子』や戦前・戦後の学級文集を取り上げ、作文の実例を紹介した。AIMS-Gifuを実際を使用することを通して書くことの変遷を概観し、午前の議論で出された書くことの指導に関する論点とのつながりを考えながら、現在の書くことの指導についてのとらえ方について検討していくこととした。

・第2～4日目

第2日目以降は、AIMS-Gifuに文書の資料と、ビデオとスライドによる講義のコンテンツを活用して進めた。講義のコンテンツは、いずれも10～15分で作成した。資料とコンテンツは新しいものを毎週追加し、課題を与え、それに基づいて「掲示板」に書き込むかたちで議論を行った。

「コース文書」に載せた資料と講義のコンテンツは全体で次のようなものである。(テキストに簡単なアナウンスを載せた。)

8月1日以降の資料

①「定義文」

「8月1日以降の最初の資料です。1日は『漢作文』『書簡文』をとりあげましたが、その時期の学校で行われていた作文についてです。短いですがご覧下さい。」

②明治期の作文教授案

「前に紹介いたしました『定義文』の時代の指導案を載せました。文章を書くために題材をどのように扱っていたか、現在との違いは？など、ご感想を掲示板にお寄せください。」

・ビデオ資料1

8月1日以降の最初のビデオ資料です。

・ビデオ資料2

・ビデオ資料3

・ビデオ資料4

これらの資料を視聴し、「掲示板」上の議論に参加するかたちで進めた。事例については、2.において取り上げる。

・第5日目

第2～4日目までの議論を整理し、「書くことの指導において何を教えるのか、そのための方法はどのように行われてきたか」について議論を行った。研修コース担当教員からは「新課題主義」に関する資料を提示し、現在の教科書における書くこと領域の教材との接点について検討した。

2. 資料の提示と掲示板における意見交換

第2～4日目までの活動について、先に示した「コース文書」内の資料より「②『定義文』時代の教授案」の一部と、それに関する「掲示板」上でのやりとりの一部を以下に示す。

教授案として、次のものを取り上げた。

○尋常第四年級作文（物性効用）教授案 町田弥平

題目「水」（六月四日分）

作例：水は動物・植物の養液にして地球上最も欠くべからざるものなり。若し一日も水なきときは万物生育すること能はず。然れども亦時に洪水氾濫等の害あり。

観念開発

(教) 「みづ」と云ふ字を書き得るものは挙手せよ。

(生) 従ふ。

(教) 某生来り書け。

(生) 「水」と書す。

(教) 生等は常に此物を見るなべし。此物は人の為如何なる効用ありや。

(生) 人の養ひになるものなり。

(教) 可。

(教) 禽獣には如何。

(生) 同じく養ひになるたり。

(教) 可。

(教) 虫魚には如何。

(生) 同じく養ひになるなり。

(教) 可

(教) 人及禽獣虫魚を総称して何と云ふや。

(生) 「ドウブツ」と云ふ。

(教) 可

(教) 然らば水は「ドウブツ」の如何なる効用ありや。

(生) 動物の養ひになるなり。

(以下省略)

(野地潤家編(1976)『作文・綴り方教育史資料』桜楓社、pp.76 書式を一部変更した。)

この明治19年に行われた授業の指導案を資料として、題材の扱いと文体、文章の特徴等について

て意見を求めた。この時期の作文の特徴については、前の資料と講義コンテンツで解説を行っており、当時の作文教育の内容について理解した。この資料では教師と生徒のやりとりが想定されており、実際に指導を構想する立場の視点から考えることにより、やりとりを通して作文指導について考える論点を明確にしていくことを意図した。

この資料は8月前半に「コース文書」に載せたが、その後、9月2日の第5日目の前まで継続して書き込みが行われた。「掲示板」での意見交換、議論の一部を以下に示す。「作成者」については、A、B、Cとした。(本稿への引用については、研修教員より承諾を得ている。)

現在のフォーラム：5日目に向けて 表示18回

日付：2005-08-09 14:32

作成者：A

件名：資料を拝見しました。

アップしていただいた資料を拝見しました。

先生のおっしゃる通り、書くことにおける子どもらしさというのは、どのようにして入ってきたのでしょうか。私も不思議に思いました。

きっと随分最近のことではないかと考えます。

この時代はまだ、必要に応じた書くであったということ、よく分かりました。

では、日記のようなものは、いつ頃から学校教育に導入されたのでしょうか。

私は最初の研修の時に「書くことによって救われる生徒もいる」と申しましたが、そういう発想が出てくるのは、ずっと後のようですね。

単語図は興味深かったです。あの絵は、リアルさを追求しているのでしょうか。

とても小学生が喜ぶような絵ではない気がするのですが。

そのように子どもに迎合していないのが、当時の教育らしさなのかなと思います。

お忙しい中、貴重な資料をありがとうございました。

資料とともに課題に対しては最初はなかなか書き込みはなされず、上のような自由なかたちでの書き込みが最初になされた。こうした書き込みをきっかけとして、課題に対する意見も書かれるようになった。掲示板には表示回数が出るようにしてあり、研修教員、研修担当者がそれぞれの意見をどの程度読んでいるかを把握しつつ参加することが可能になったものと思われる。

現在のフォーラム：5日目に向けて 表示20回

日付：2005-08-12 16:12

作成者：B

件名：「水」の作文について

資料を拝見いたしました。率直に言って「本当にこんなことやってたの?」というところですが、徹底的に無駄を省いたスタイルは個人的には嫌いではありません。内容は別として大変洗練された言葉のやり取りで、「もう充分じゃないか」と思うくらいです。ある意味では現在のスタイルに対するアンチテーゼともなるのではないのでしょうか?

さて、現在との違いということに関しては大同小異だと思います。つまり「水」というものについての考察を深めさせ、その上で作文をするということです。作文を書く上で最も困るのは考えが出てこない時ですが、その意味では上手に誘導していると思います。丁々発止とも言えるやり取りの中で「水」の考察が深まっているでしょう。

ただ、現在と異なるところはそのスタイルです。一つは授業者の話し方であり、生徒の受け答え方です。これは改めて言うまでもないことですが。もう一つは時間のかけ方とその方策でしょう。もし現在この授業と同様なことをしようとすれば、極端な場合数十倍の時間をかけるのではないのでしょうか？当然「水」へのアプローチも様々な手法を通して行われると思います。あの手この手で「水」を徹底的に分析した上で書かせるわけです。

作文をする訳ですから、考えが深まったほうが良いとは思いますが、逆に情報が多すぎると、その情報すべてを処理できなくなってしまうたり、場合によっては情報に流されてしまうという危険性も否定できません。その生徒の発達段階に見合ったさじ加減が大切になってくると思います。

最初に書きましたように、一見すると不親切に感じられてしまう授業ですが、見方を変えたと生徒をうまく導いているとも思います。

(私は高校ですので、実際のところはよくわかっていません。小中での実態を教えてくださいければ幸いです。)

現在の指導方法との関連、また題材の扱いについても言及がなされた。題材の扱いという論点について、次のような意見も出された。

現在のフォーラム：5日目に向けて 表示17回

日付：2005-08-17 10:53

作成者：C

件名：「水」の作文教授案について

このような指導案を見たのは初めてでしたので、興味深く拝見しました。教師が「こういう作文を書かせたい」という思いをきちんと明らかにして授業に臨んでいることは、現代でも共通することだと思います。ただ、見事に？一問一答式に授業が進められていることは、学習の深まりや児童同士の考えの関わりという点では、現代との違いを感じました。教師の書かせたい意図が重要視されすぎて、児童個々の見解が表に表れていないようにも感じます。しかし、「水」という言葉の観念（概念）を的確に押さえるという観点からすれば、教師主導的な展開も時には必要なのかもしれません。授業の最後に、今までの意見を総括して言葉でまとめさせ、その後文章に表していくという活動がありました。現代でも通じる学習形態だなあと感じました。

題材に関する議論を通して、研修教員Bは学習者を取り巻く情報の現状を視野に入れた意見を述べている。

現在のフォーラム：5日目に向けて 表示10回

日付：2005-08-30 12:36

作成者：B

件名：返信：「水」の作文について

再び失礼いたします。作文指導において考察を深める時間が増加してきた理由ですが、根源的には現代の社会風潮そのものがあると思います。つまり現代そのものが情報過多なのです。私たちの周りには情報が溢れています。そして大事なことは昔であれば「大人が持つ情報」と「子供が持つ情報」に大きな差があったのですが、現代ではその差がかなり接近してきているということでしょう。言葉は悪いですが「子供だまし」が通用しにくくなってきていると言えます。しかしここで重要なことは、大人と子供では得る情報が等分であっても解釈できる情報・総合できる情報の量には大きな差があることだと思えます。情報とまでいなくても例えば自分自身への考察においても子供は浅薄なレベルに留まってしまうでしょう。

現在の作文指導においてはむしろ社会の風潮における情報過多から子供達を守ってあげる必要性もあるのかもしれませんが、「過ぎたるは尚及ばざるがごとし。」ではありませんが、発達段階に見合った情報量・処理可能な情報量を与えていく中で子供達が自信をつけていくのではと思います。

題材に関する意見交換を通して、書くことの学習と社会生活との関連という見方が提示され、第5日目に向けた教材化、学習材化に関する議論がなされた。

3. 成果と課題

今回の研修の目的に即して、AIMS-Gifuを活用しつつ研修が進められたものの、研修コース担当者として以下のような課題が残された。

資料や講義コンテンツを準備したが、現在用いられている教材や指導法などを積極的に取り上げる必要があると感じた。9月以降、学校での授業研究発表を予定している研修教員もいたが、それに関する教材を研修期間中に取り上げていくことにより、大学研修の位置づけも明確にできるのではないかと考える。また、研修担当者も研修教員と指導上の課題を共有しつつ議論を行えるものと考えている。

AIMS-Gifuを活用し、研修教員がインターネット上で資料や講義コンテンツを視聴し、議論に参加することを意図した。講義コンテンツについては、短い時間の間に課題を出していくなど、普段の教室における講義の進め方とは異なった方法をとる必要性を強く感じた。また、掲示板での意見交換についても、どのようなスタイルが有効であるか考えていく必要を感じた。